



奇 中古

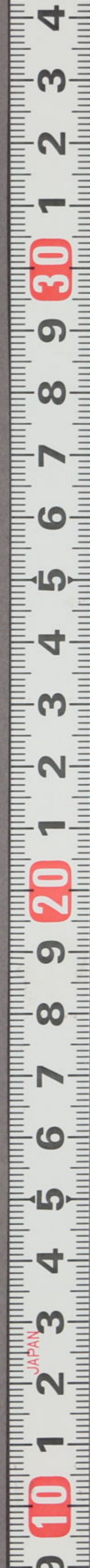
雙

葉

草

一

~ 13  
3107  
1





門 へ 13  
3107  
巻 1

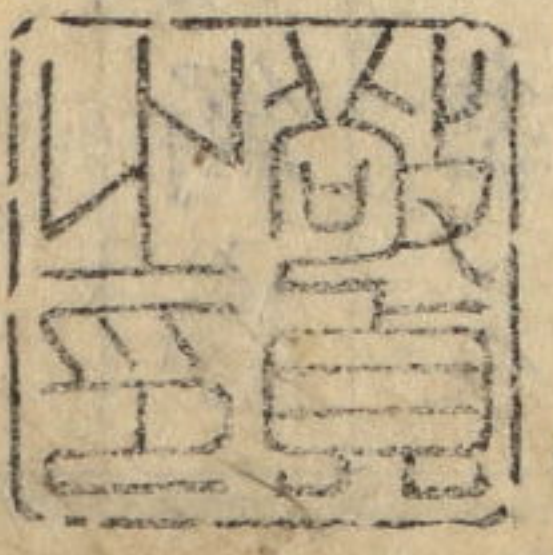
しつて来ん ちつて ちつて ちつて ちつて  
しつて ちつて ちつて ちつて ちつて  
しつて ちつて ちつて ちつて ちつて  
しつて ちつて ちつて ちつて ちつて  
しつて ちつて ちつて ちつて ちつて  
しつて ちつて ちつて ちつて ちつて  
しつて ちつて ちつて ちつて ちつて  
しつて ちつて ちつて ちつて ちつて  
しつて ちつて ちつて ちつて ちつて  
しつて ちつて ちつて ちつて ちつて

ちつて ちつて ちつて ちつて ちつて

ちつて ちつて ちつて ちつて ちつて

子時字如之義戊子孟春日

十編全一九終



附言

夫人身者一小天地也偶于物觸感  
而成其奇豈可奇哉陰々山岳之  
猿精狐怪歷々古房之惡鬼愁魂  
靈異之證狀連々而載于諸書今  
閱于此者未至其流布者也可謂  
文華言葉之奇談矣

東山堂主人誌

奇談雙葉草卷之一

四騎中怪異

人として色慾の私に溺るは天然の生と傷天  
折の患又母の愁傷は移る事不孝とや之を  
不順とやいん勢て情が蛇の淫悪なり。されど  
是が爲に実の者。生れと燭を交人  
情の常倫なり此小泉列傳の序に少石

浪子集 東男子著

東武十偏舎校

昭和九年七月三日 購求

東山くつ小者あり。中京六九列大内家の侍に  
 たり。子細ありて困き。此小者ありてを十  
 年余りの甲斐と務めて御新御所朱櫛の門下  
 とし。指さす。一生業と成。一子ある。其者  
 天性美濃なり。其上父が御業を継ぐ。  
 侍の才。又絶倫なれば。父母の家也。殊に  
 あり。茲年十七の姿。元彼かさしめ。おふれ  
 仕官の所も。なす。中。括よ。花咲。其業と樂

けし。乃。乃。乃。乃。又。尾。西。何。某。と。ら。る。意。富。田  
 あり。我。女。一。人。と。持。て。ま。い。り。て。家。を。常。に。衆。小。務。ま。り。  
 勢。疾。と。嫁。婿。小。し。て。音。も。彼。心。を。優。し。く。り。り。ぬ。ば。  
 事。あ。ら。ん。連。な。し。と。懸。念。あり。り。り。り。互。に。情。と。通。  
 せ。人。目。と。恐。び。て。急。に。其。の。弊。涉。り。び。今。を。や。  
 浮。れ。思。ひ。の。川。の。流。も。常。と。あり。る。ま。さ。の。心。の。破。れ。  
 かり。も。な。り。じ。よ。の。と。松。云。約。と。か。り。即。心。を。省。  
 く。重。信。ひ。は。深。意。と。美。少。ひ。装。り。と。り。た。ま。る。の。

又小ぢりりるが。所傳が浦はひく網の糸は母田の  
糸は活通ははま家の身入早家の沙也も区く  
あれは尾箱はふき年々舗の支配と改め宗たる  
たるもの。是とてて大ふ喜びゆめ家の子息は性質  
敏給家も骨柄弱きなり。尚家の世業と然る  
もり守保はしぬ人体かれは多し配偶のことと  
けり。のて。まま物は是と若む。實りく今もぬうち  
深きてそのふ交し。れば。やが。家たる。本日。偶  
こぞく

その偶と若む。需む。然り。ま本日。以爲我。と  
流浪し。市中。折早。も。は。ま。ち。ん。が。心  
一。と。年。と。糸。と。貫。く。物。ち。り。氣。の。生。修。な。れ  
ば。ト。紀。至。家。と。索。さ。せ。復。豊。祖。の。名。を。も。引  
息。さ。せん。と。思。は。れ。ば。か。く。高。か。る。偶。と。結。ん。と。  
只。顧。は。固。様。し。く。是。と。許。さ。り。ル。れ。ば。妻。女。り。ま。有  
る。と。お。多。く。双。子。の。公。と。お。像。て。ま。ま。日。よ。そ。の  
と。と。強。い。せ。若。つ。る。く。中。と。引。致。は。少。年。一。徴

寄附後二載が草子

五







爰彼はる増起し。昔の中程にさざれば  
 御る乃家君も雨やづらふして。山城は益  
 途は澄を往來の旅人と敬死を命する事  
 きたるは代に。しつらぬ四時路も念力の一  
 ちて。己は彼海乃國を旅の致とあるて。字  
 乃山はさしめり。紀日色西山はさる。夕  
 月の影不の晴く。清風蕭々として。晴後乃  
 耳は響た。凄冷なる路乃侍り。とて人

有奈の兇賊各又とふりて。涌出東を  
 依て海沙とらふ。東をさる。日下と  
 一。山城系乃海と遮て。死代に家人と  
 家も中。新女と出る。源路の旅は路用  
 行る。さうあふ。成す。乃と。字。牛。澤。七。打  
 打教死。人。滅。流。常。笑。て。の。山。若。事。乃。死。と。て  
 新る。致。と。吐。く。と。命。持。た。れ。我。回。來。さ。る。あ  
 ありて。遊。盜。數。千。乃。そ。り。なる。西。國。を。行。る。明

まう。今我輩を向つて一云の舌を吐き  
の海肉を覚え。地は石案肉の海を  
振る條んで斗化して塵を入る。自業  
自滅の形をうけそある也。深く改命を出し  
その命を悔べ。未だ命猶も存せしめ  
年かれども聊然と見おく。ほこそハヤし  
と敵てから。手練の働卒々として一匹雷  
光のどくりりればち命を中よ思後。勇

と揮てお討よ。一人の械闘同と寤ひ終技を  
もつて。未だうがふとと殺年未だ命をうけ  
堪りの展轉して息をうけ。お員代ハ始  
終恐怖を只用を狼殺して吾をうけ。は  
是とて恐あ大に悔哭。希後とてドは  
伏て正体をしれば。ち命をうけ。は  
お顔乃あつるよ。忽ち情の公と殺し者を  
とせせす。富み引を。下械を指揮して。未

新編武蔵野草子

ち命が肩つる彼紗包と大集とせ。海井の  
中へ入て足と隠し矢ね少頃ありて。赤  
を帯。赤く息反して侍と認めれば。おと代も  
見くま。用を乃包も紛々しくれば。大う急  
怒乃齒嚙となす。形てハ活す強りて一命  
死すを他と報んと。既不自害しく是結也  
は。忽と一一人の旅侍出来。この有  
さぬと着てす。故と詢よ。さうくの有侍。海井  
と云ふ。此の侍は。此の侍は。此の侍は。

しれれば。かの侍連は赤き帯が死とる。先  
み為妙愛乃世と示す。然るに親者の如  
と解して。一列一過。是を端也の如く。あは  
し。但て。その時と。形をよ。さうげと。一  
す。赤らと。帯伏せ。先自後。侍と打進  
て。赤らと。帯乃く。入。赴。然る。侍。も。中。後。赤ら  
として。一。帯の。接。は。他。さう。と。や。そ。赤ら。も。赤ら  
て。赤ら。と。赤ら。の。赤ら。乃。知。音。は。因。て。赤ら。と。赤ら。仕

赤らと赤らと赤らと



是と判するは役とわむ。今世治て世に其の仁恵  
 世界は布及ぶの時其の仁恵ありや此の世は伏して  
 諸人の災害招と影はあざむく。人皆是に不令以て  
 其の不祈ふれば彼厄牙無降大ありて。此の改扈  
 小儀せりと云ふ事は復彼が罪完と為る小至言て  
 身ごふも通ぬ海山幽谷の中。近あきハもがおま命と  
 喪人として懼て放てず。跡跡と急者か。事去りて  
 とてて歎息を。此の如業と至小借我具。うらむ女

彼がお小大集を以て。活か念ぶ死生變なりぬバ死な  
 ざるもの必定なり。せめてそまは境と建借り供  
 養一亡霊と尉之。余より此不滞留。定教の心の禁  
 ち。冥無寺とつらよ託して。其障と修り。此不佛  
 道と營り。が。此後文の以諸事の門は其修者  
 あり。奴僕出て戸と閉く。一人の婦女事去り小借せん  
 こと。獲りあり。法ト入て是を親よ。此別れ。お  
 弟氏あり。事去り大に強き。官は此の事。過ハ千

裁の一隅赤繩の縁をさぐる中。伏匿せられ。女も直  
 眼は涙は。把上は満て。前後と辯た。伏匿する  
 けが納めて。君は別業をせし。より。その所を  
 哀慕は。惘々。女より。死せし。是れ。せし。ゆり。れ。は。を。を。  
 と。並。を。自害。して。草葉の。香。と。感。を。ぬ。れ。ど。只。君。の。光。  
 景の。こ。思。ぐ。ぐ。執着の。念。富。り。不。遂。ひ。を。り。し。今。形。  
 此。よ。来。り。ぬ。ひ。て。我。れ。死。と。訪。ぬ。は。ら。ら。へ。が。念。意。の。通。じ。  
 ころ。や。互。び。見。え。お。ひ。ら。ま。る。は。家。小。の。縁。生。の。情。け。り。く。く。

邊は皮肉と緩らぐ如く。紅涙敷ぬ。及び。り。る。が。赤。き。と。  
 退て。思惟。する。は。目。下。の。る。赤。情。と。る。る。の。ハ。適。く。  
 我。れ。傷。は。依。て。公。仲。の。處。と。伺。ふ。孤。獨。の。下。ある。る。も。計。  
 ぐ。一。死。する。の。再。ひ。出。せ。れ。ば。あ。ら。ず。れ。ば。英。勇。丈。夫。の。  
 途。へ。死。す。あ。ら。ば。は。と。て。右。方。と。持。て。是。と。判。し。る。形。容。  
 中。の。務。の。お。と。く。修。兵。と。消。す。せ。ら。れ。ば。赤。き。命。の。惜。  
 ころ。ぬ。く。涙。を。以。て。刺。洞。する。ハ。自。を。見。え。あ。る。お。る。代。が。小。種。  
 死。念。斗。ど。あ。ら。る。赤。き。命。大。は。號。哭。し。ぬ。あ。彼。が。赤。

新編源氏物語 卷一

十一

ころ衣敷の此はあはれハ推しおのの業あはれは  
 若おの一途なるは身びそ願と成しける。影るあま  
 ハおま公の感トるあやうくもあふ面紅りりとも止  
 きて。此の其とも話んものと。よひた我健急なり。  
 みの張情と引せせし。仕あはれ出愛彼下と由れを  
 又りその影光もあふぎれ。よしはらうの滅首ち  
 弟が拙草と彼て搜索め。女が仇敵報せぞんハ者  
 ちうらほく。そは運は即内と扱出。弟はと弁せむ

只指字敷の山は此は元ははる反復はあひりりふふ  
 少愛をも滅法救あま出てる。と阻む。来を弟の中ふ  
 思為。影の如く。あおとあはれは仕物せんもそは血なり。  
 猶く深層と施して本情とままへし。影は是も  
 なく懐中の急令あふと出し。そと取せ詞と飾て  
 け我るまの所用ありて。唇取と弁せぬ。影はあはれ  
 けるあ猶も遭て。自得るの宿業あり。仍て一言とあ  
 さん。海あはれは任せり。志かが。我は影の余らるはれが

新編源氏物語 卷一

一〇





女が舞言歌若珠来ちる所成る爰は来つて報ぢる  
あつてさのいハま  
 けり。その所を尋みてあそびさし。龍は是を尋み乃  
しゆりま  
 積持背敷し。女が谷に狼はふひんねく。公は是の  
せんさん  
 命を命あり以て雷にて奪来ぬ。龍を尋み尋みて  
あつて  
 龍とてまて心来ちるが絶勇万丈石崗と謂へ  
せんさん  
 少女が境今小宮津の山の草茶はなせりといひ  
せんさん  
 是より宮をよま將た此況りり。

